

そこに愛はあるんか

校長 武井 正明

先週末から特に「愛」について考えることが多くなっている。

私を吉田中学校の校長として突き動かしているものの根本は「吉中愛」に他ならない。総ての吉中生に素晴らしい人生を歩んでほしいという一念で、私は校長を務めさせていただいている。私は君たちを孫だと思っている。

ひとり娘に対しても想いは同じだ。とにかく娘は宝だ。それ以外の表現はない。幸い現在は、私と同じくらい大切にしてくれる彼が傍にいてくれる。安心だが少し寂しい…。

その宝に手を挙げたことが一度だけある。

娘は当時中学1年生。吹奏楽部に入部して丁度中学校生活が軌道に乗ってきた今頃だったのだろうか。可愛くて仕方がなかった。

いつも帰ってくるはずの娘が、いつもの時間に帰ってこない。妻が最初に心配した。なかなか帰ってこない。そのうち私も心配になってきた。そしてついにふたりで探すことになった。始めはそのうち見つかるだろうと呑気に構えていたが、次第に辺りも暗くなってきて、いよいよ冷静でいられなくなった。どこをいくら探しても一向に見つからない…。

いったい何処にいるんだ萌子…。

そうなるも娘にもし何かあったら、悪い奴らに囲まれていたら、と次々と悪い妄想が頭を駆け巡り、居ても立ってもいられなくなってきた。

と、その時。

路上で友達とふたりでいる娘を発見した。

私は車を降り娘に駆け寄り「どれだけ心配したと思ってるんだ!!」と言うか早いか、気付いた時には娘の左頬をひっぱたいていた。隣の友達は眼に入っていなかった。

娘と友達は先輩に付き合わされて、ゲームセンターで先輩が遊ぶのを見ていたという。

私は帰宅した後、自分の掌を見つめ、カッとして娘を殴った自分を後悔していた。

「愛のムチ」という言葉がある。

あれは暴力を奮う側にとって都合のいい言葉だと思う。今はそういう意識を強くもって我が子に向き合わないといけない時代になった。「愛のムチ」などもはや死語なのだ。

昨年秋の披露宴の最後に、その時のことを娘は涙でスピーチしてくれた。

聞きながら中学時代の萌子が浮かんできた。本当に可愛かった…。

私の掌に「ムチ」ではなく「愛」を感じてくれた娘のしあわせをいつも祈っている。